

Title	『韓詩外伝』研究ノート(一) : 『荀子』引用文との 対照表
Author(s)	余, 崇生
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1983, 17, p. 21-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8393
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『韓詩外伝』研究ノート（一）

——『荀子』引用文との対照表

余 崇 生

一

『韓詩外伝』は、文帝・景帝・武帝三代にわたって活躍した、儒者韓嬰の遺著である。

漢代において、『詩経』を伝授したのは、韓嬰学派のほか、齊・魯・毛の三学派があった。

文帝の時、魯人申培は『詩経』を伝え、『訓話』を作った。これは『魯詩』と称される。つぎに燕人韓嬰も『詩経』を伝授し、『内外伝』を著した。これを『韓詩』と呼ぶ。景帝の代に至って、齊人の轅固もまた、『詩経』を伝授して、『詩伝』を作ったが、これは世に『斉詩』と称される。そして、この三家詩は、いずれも前漢の初年に博士官に立てられた。また、その後孔子旧宅の壁中より発見された、先秦の簡書と民間流伝の古本とは、みな先秦の文字、すなわち古文で書かれており、魯人毛亨は、この古文詩経を研究して、『故訓』三十巻を著した。これは、『毛詩』と称されて、趙人毛萇に伝授され、平帝の代に至り、博士官に立てられた。周知のように、今文経、古文経の間に

は、多くの異同があり、そのため経義解釈において、学者間に少なからぬ議論を引きおこした。しかし、後漢に入ると、毛詩はしだいに重視され、鄭玄が毛詩の説を採用し、箋注をつけて以来、これが世に行なわれることになった。

一方、他の三家の詩解釈はしだいに衰退し、顧みられなくなった。すなわち、「齊詩、魏の代 己に亡び、魯詩、西晋に亡」（『隋書』経籍志）なのである。ところが、韓詩については、『隋書』に「韓詩、存すと雖ども、これを伝える者無し。ただ毛詩鄭箋のみ、今に至るまで独り立つ」と言われるものの、『旧唐書』経籍志・『新唐書』芸文志は、ともに『韓詩』・『韓詩外伝』を載せており、『宋史』芸文志も「韓詩外伝十卷」と記していることから、韓詩は唐代において存在していたが、北宋以後散失したと考えられる。従って、現在三家詩説の中ではほぼ実態を伝える形で残っているものは、ただ『韓詩外伝』十巻のみである。

このように、元来、『韓詩外伝』は、『詩経』解釈学の一派の言説であるから、当然、解釈や引用の上から言って、当時の諸文献と深い関わりがある。まさに「采るところ、多く周・秦の諸子〔の文〕と相ひ出入す」（『四庫全書総目提要』同書の項）るわけである。

そこで、『韓詩外伝』と他の諸文献との関係についての詩研究がなされてきた。わけでも、豊嶋睦氏の「韓詩外伝に見える思想の源流」（昭和五十五年・池田末利博士古稀記念東洋学論集）所収・『同事業会刊』はその代表的な研究例である。

豊嶋氏の上記論文中、「韓詩外伝の古書引用頻度回数表」がある。その数値によれば、第一位のいわゆる『詩経』よりの引用は別として、第二位の『荀子』が五十五条の多きにわたって引用されているという。これは、第三位の

『論語』十五條、第四位の『礼記』十三條などに比べて、とびぬけて多い数値である。

このような引用頻度数より推して、豊嶋氏は、「韓詩外伝の思想に大きな影響を及ぼした文献として先づ『荀子』が数えられる」（同上書四五七頁）と結論を出しておられる。

この結論はもちろん正しい。とすると、次の問題は、それではどのような相互影響があったのかという具体的分析となる。

この点について、豊嶋氏は、すでに「韓嬰思想管見——『韓詩外伝』引用荀子句を中心として」（昭和十年・『支那学研究』第三十三号）において論述しておられる。しかし、紙幅の関係上、『荀子』の引用句すべてを示されていないわけではなくて、論述上の必要箇所のみを引用しておられるにとどまっている。

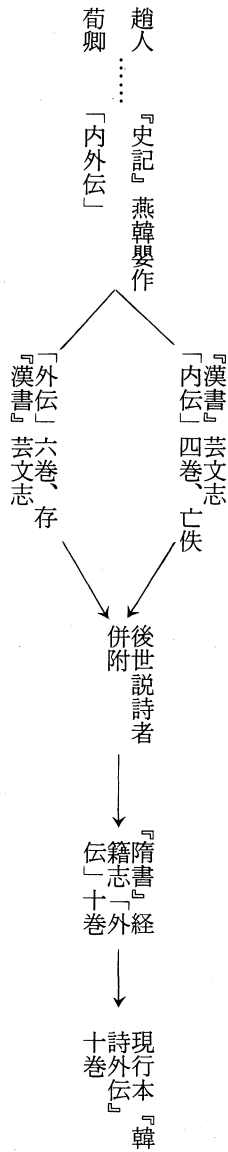
私は、『韓詩外伝』と『荀子』との思想的影響関係を重要なものと考え、豊嶋氏の業績を継ぎつつ、その検討を試みているわけであるが、今回はとりあえず、豊嶋氏の論考の補論的立場に立って、『荀子』のその引用箇所を抜き出し、『韓詩外伝』との対照を示す表を報告として提出しておきたいと思う。

すでに豊嶋氏の前記頻度表によって明らかであるが、『韓詩外伝』第七卷から、急激に『荀子』よりの引用が減っている。これは、『韓詩外伝』巻一から巻六までの部分と、巻七以下の部分との間に、編修上の方針の相違があったこと、すなわち文献成立上の相違があったことを示していると言えよう。

この点について、西村富美子氏の「『韓詩外伝』の一考察」（『中国文学報』第十九冊）の分析と一致する。すなわち、西村氏はつぎのように述べる。巻一より巻六までは、「国風↓頌↓小雅↓大雅と、大体現在の毛詩の順序に従っている」ひとつのまとまりであり、「巻七以後詩句の逸した章段が急増することを併せ考えると、巻七以下は拾遺の

このように、問題になるのは、六卷分という分量を一つのまとまりとして考えてよいのではないかという点である。今日に残っている『韓詩外伝』は十卷本であるが、『漢書』芸文志では六卷本である。この四卷増加について、『四庫全書総目提要』は「けだし後人の分つところならん」と解釈している。

しかし、その根拠については、特に物証があるわけではないから、別の解釈も可能である。すなわち、六卷分はまとまって流伝してきたものと考え、同じく『漢書』芸文志が記載するところの「韓内伝四卷」の系統のテキストが、のちに外伝に加えられていって十卷本となったのではなからうかとする推測の可能性である。これを図式化するおとつぎのようになる。



二

テキストは、『韓詩外伝』・『荀子』ともに四部叢刊初編所収本を使った。なお、豊嶋氏が示した五十五条と数量が

異なるのは、おそらく、数えかたの相違（たとえば下記表の最初の条(1)の場合、『荀子』引用を二条と見ることでもきるの）であって、結果的には、豊嶋氏の調査と一致するものと考ええる。

『韓詩外伝』

『荀子』

<p>(1) 卷一 第一章 在天者莫明乎日月、在地者莫明於水火、在人者莫明乎禮義。</p>	<p>天論篇 在天者莫明於日月、在地者莫明於水火、在物者莫明於珠玉、在人者莫明於禮義。</p>
<p>(2) 第六章 君子有辯善之度、以治氣養生、則身修彭祖、修身自強、則名配堯舜。</p>	<p>修身篇 扁善之度、以治氣養生、則身而彭祖、以修身自強、則名配堯舜。</p>
<p>(3) 第十一章 傳曰、君子潔其身而同者合焉、善其音而類者應焉。</p>	<p>不苟篇 君子絜其身而同焉者合矣、善其言而類焉者應矣。</p>
<p>(4) 卷二 第六章 傳曰、雩而雨者何也、曰、無何也、猶不雩而雨也。</p>	<p>天論篇 雩而雨、何也、曰、無何也、猶不雩而雨也。</p>

第九章

(5) 曾子曰、君子有三言、可貴而佩之、一曰無內疎而外親、二曰身不善而怨他人、三曰患至而後呼天。

法行篇
曾子曰、無內人之疏而外人之親、無身不善而怨人、無刑已至而呼天。

第十二章

(6) 顏淵侍坐魯定公于臺、東野畢御馬于臺下、定公曰、善哉、東野畢之御也。

哀公篇
定公問于顏淵曰、東野畢之善馭乎、顏淵對曰、善則善矣、雖然、其馬將失。

第十八章

(7) 君子易和而難狎也、易懼而不可劫也、畏患而不避義死、好利而不為所非、交親而不比、言辯而不亂、盪盪乎其義不可失也。

不苟篇
君子易知而難狎、易懼而難脅、畏患而不避義死、欲利而不為所非、交親而不比、言辯而不辭、蕩蕩乎、其有以殊於世也。

第三十一章

(8) 夫治氣養心之術、血氣剛強則務之以調和、智慮潛深則一之以易諒、勇毅強果則輔之以道術、齊給便捷則安之以靜退、卑攝貪利則抗之以高志。

修身篇
治氣養心之術、血氣剛強則柔之以調和、智慮漸深則一之以易良、勇毅猛戾則輔之以道順、齊給便捷則節之以動止……卑濕重運貪利則抗之以高志。

<p>(9) 卷三 第四章 王者之論德也、不尊無功、不官無德、不誅無罪、朝無幸位、民無幸生、故上賢使能而等級不踰、折暴禁悍而刑罰不過。</p>	<p>王制篇 王者之論、無德不貴、無能不官、無功不賞、無罪不罰、朝無幸位、民無幸生、尚賢使能、而等級不遺、折愿禁悍而刑罰不過。</p>
<p>(10) 第五章 傳曰、以從俗爲善、以貨財爲寶、以養生爲已至道、是民德也、未及於士也。行法而志堅、不以私欲害其所聞、是勦士也、未及於君子也。</p>	<p>儒效篇 以從俗爲善、以貨財爲寶、以養生爲已至道、是民德也。行法志堅、不以私欲亂所聞、如是則可謂勦士矣。</p>
<p>(11) 第七章 成侯嗣公、聚斂計數之君也、未及取民也、子產取民者也、未及爲政也。管仲爲政者、未及脩禮也。</p>	<p>王制篇 成侯嗣公、聚斂計數之君也、未及取民也、子產取民者也、未及爲政也、管仲爲政者也、未及脩禮也。</p>
<p>(12) 第二十二章 傳曰、魯有父子訟者、康子欲殺之。孔子曰、未可殺也、夫民不知父子訟之爲不義久矣、是則上失其道、上有道、是人亡矣、訟者聞之、請無訟、康子曰、治民以孝、殺一人以僂不孝、不亦可乎。</p>	<p>宥坐篇 孔子爲魯司寇、有父子訟者、孔子拘之……季孫聞之不說、曰、是老也欺子……今殺一人以戮不孝、又舍之。</p>

<p>(13) 第廿八章</p> <p>夫詐人者曰、古今異情、其所以治亂異道、而衆人皆愚而無知、陋而無度者也、於其所見猶可欺也、況乎千歲之後乎。</p>	<p>非相篇</p> <p>夫妄人曰、古今異情、其所以治亂異道、而衆人惑焉、彼衆人者、愚而無說、陋而無度者也、其所見焉、猶可欺也、而況於千世之傳也。</p>
<p>(14) 第三十章</p> <p>孔子觀於周廟、有欬器焉、孔子問於守廟者曰、此謂何器也、對曰、此蓋爲有坐之器。</p>	<p>宥坐篇</p> <p>孔子觀於魯桓公之廟、有欬器焉、孔子問於守廟者曰、此爲何器、守廟者曰、此蓋爲有坐之器。</p>
<p>(15) 第三十一章</p> <p>吾文王之弟、武王之弟、成王之叔父也。</p>	<p>堯問篇</p> <p>我文王之爲子、武王之爲弟、成王之爲叔父。</p>
<p>(16) 第三十二章</p> <p>傳曰、子路盛服以見孔子、孔子曰、由疏疏者何也。</p>	<p>子道篇</p> <p>子路盛服見孔子、孔子曰、由是裾裾何也。</p>

<p>(17) 三十五章 王者之法、等賦正事、田野什一、關市譏而不征、山林澤梁、以時入而不禁。</p>	<p>(18) 三十六章 孫卿與臨武君議兵於趙孝成王之前、王曰、敢問兵之要、臨武君曰、夫兵之要、上得天時、下得地利、後之發、先之至、此兵之要也。</p>	<p>(19) 卷四 第三章 有大忠者、有次忠者、有下忠者、有國賊者。以道覆君而化之、是謂大忠也。以諫非君而怨之、是謂下忠也。……是謂國賊也。</p>	<p>(20) 第十章 禮者、治辯之極也、強國之本也、威行之道也、功名之統也。</p>
<p>王制篇 王者之法、等賦政事財萬物、所以養萬民也。田野什一、關市譏而不征、山林澤梁、以時禁發而不稅。</p>	<p>議兵篇 臨武君與孫卿子議兵於趙孝成王前、王曰、請問兵要、臨武君對曰、上得天時、下得地利、觀敵之變動、後之發、先之至、此用兵之要術也。</p>	<p>臣道篇 有大忠者、有次忠者、有下忠者、有國賊者。以德覆君而化之、大忠也。以德調君而輔之、以是諫非而怨之、下忠也。……國賊也。</p>	<p>議兵篇 禮者、治辯之極也、強固之本也、威行之道也、功名之總也。</p>

<p>(21) 第十一章 君人者以禮分施、均徧而不偏、臣以禮事君、忠順而不解。</p>	<p>君道篇 請問爲人君、曰、以禮分施、均徧而不偏、請問爲人臣。曰、寬惠而有禮。</p>
<p>(22) 第十五章 人主欲得善射、及遠中微、則懸貴爵重賞以招致之、內不阿子弟、外不隱遠人、能中是者取之、是豈不謂之大道也哉。</p>	<p>君道篇 人主欲得善射、射遠中微者、懸貴爵重賞以招致之、內不可以阿子弟、外不可以隱遠人、能中是者取之、是豈不必得之之道也哉。</p>
<p>(23) 第十六章 問楛者不告、告楛者勿問、有諍氣者勿與論、必由其道至、然後接之、非其道則避之。</p>	<p>勸學篇 問楛者勿告也、告楛者勿問也、說楛者勿聽也、有爭氣者勿與辯也、故必由其道至、然後接之、非其道則避之。</p>
<p>(24) 第二十二章 夫當世之愚、飾邪說、文姦言、以亂天下、欺惑衆愚、使混然不知是非治亂之所存者。</p>	<p>非十二子篇 假今之世、飾邪說、文奸言、以梟亂天下、喬宇嵬瑣、使天下混然不知是非治亂之所存者有人矣。</p>

<p>(28) 第二十六章 安舊移質。習貫易性而然也。夫狂者自齷、忘其非芻豢也、飯土而忘其非梁飯也。</p>	<p>(27) 第三十二章 所謂庸人者、口不能道善言、心不能知先王之法、動作而不知所務、止立而不知所定、日選於物而不知所貴、……從物而流……</p>	<p>(26) 第二十八章 道雖近、不行不至、事雖小、不為不成、暇日多者、出人不遠矣。</p>	<p>(25) 第二十三章 君子大心則敬天而道、小心則畏義而節、知則明達而類、愚則端慤而法、喜則和而治、憂則靜而遠、達則文而容、窮則約而詳。</p>
<p>儒效篇 習俗移志、安久移質、並一而不一、則通於神明、參於天地矣。</p>	<p>哀公篇 所謂庸人者、口不能道善言、心不知邑邑、不知選賢人善士托其身焉以為已愛、動行不知所務、止立不知所定、……從物如流……</p>	<p>修身篇 道雖邇、不行不至、事雖小、不為不成、其為人也多。暇日者、其出入不遠矣。</p>	<p>不苟篇 君子大心則敬天而道、小心則畏義而節、知則明通而類、愚則端慤而法、……喜則和而治、憂則靜而理……窮則約而詳。</p>

<p>(29) 第二十五章 嫫母力父是之喜。以盲為明、以聾為聰。以是為非、以吉為凶。</p>	<p>賦篇 嫫母、力父、是之喜也。以盲為明、以聾為聰、以危為安、以吉為凶。</p>
<p>(30) 卷五 第三章 王者之政、賢能不待次而舉、不肖不待須而廢、元惡不待教而誅、中庸不待政而化。</p>	<p>王制篇 請問為政。曰、賢能不待次而舉、罷不能不待須而廢、元惡不待教而誅、中庸民不待政而化。</p>
<p>(31) 第四章 民不親不愛、而求為己用、為己死、不可得也。民弗為用、弗為死、而求兵之勁、城之固、不可得也。</p>	<p>君道篇 民不親不愛、而求其為己用、為己死、不可得也、民不為己用、不為己死、而求兵之勁、城之固、不可得也。</p>
<p>(32) 第五章 造父、天下之善御者矣、無車馬則無所見其能、羿、天下之善射者矣、無弓矢則無所見其巧。</p>	<p>儒效篇 造父者、天下之善御者也、無輿馬則無所見其能、羿者、天下之善射者也、無弓矢則無所見其巧。</p>

<p>(33) 第二十一章 水淵深廣、則龍魚生之。山林茂盛、則禽獸歸之。禮義脩明、則君子懷之。故禮及身而行脩、禮及國而政明。</p>	<p>致士篇 川淵深而魚鱉歸之、山林茂而禽獸歸之……禮義備而君子歸之。故禮及身而行修、義及國而政明。</p>
<p>(34) 第三十一章 道者何也。曰、君之所道也。君者何也。曰、羣也。能羣天下萬物而除其害者、謂之君。</p>	<p>君道篇 道者、何也。曰、君之所道也。君者何也。曰、能羣也。</p>
<p>(35) 第二十二章 夫談說之術、齊莊以立之、端誠以處之、堅強以持之、譬稱以喻之、分別以明之。</p>	<p>非相篇 談說之術、矜莊以莅之、端誠以處之、堅強以持之、譬稱以喻之、分別以明之。</p>
<p>(36) 第十章 無禮、何以正身。無師、安知禮之是也。禮然而然、是情安於禮也。</p>	<p>修身篇 禮者、所以正身也。師者、所以正禮也。無禮、何以正身。無師、吾安知禮之爲是也。禮然而然、則是情安禮也。</p>

<p>(37) 卷六 第三章 賞。勉。罰。偷。則。民。不。怠。兼。聽。齊。明。則。天。下。歸。之。然。後。明。其。分。職。考。其。事。業。較。其。官。能。莫。不。治。理。</p>	<p>君道篇 賞。免。罰。偷。則。民。不。怠。兼。聽。齊。明。則。天。下。歸。之。然。後。明。分。職。序。事。業。材。技。官。能。莫。不。治。理。</p>
<p>(38) 第七章 遇。君。則。修。臣。下。之。義。出。鄉。則。修。長。幼。之。義。遇。長。老。則。修。子。弟。之。義。遇。等。夷。則。修。朋。友。之。義。遇。少。而。賤。者。則。修。告。道。寬。裕。之。義。</p>	<p>非十二子篇 遇。君。則。修。臣。下。之。義。遇。鄉。則。修。長。幼。之。義。遇。長。則。修。子。弟。之。義。遇。友。則。修。禮。節。辭。讓。之。義。遇。賤。而。少。者。則。修。告。導。寬。容。之。義。</p>
<p>(39) 第二十三章 約。契。盟。誓。則。約。定。而。反。無。日。割。國。之。錙。銖。以。賂。之。則。割。定。而。欲。無。厭。</p>	<p>富國篇 約。信。盟。誓。則。約。定。而。畔。無。日。割。國。之。錙。銖。以。賂。之。則。割。定。而。欲。無。厭。</p>
<p>(40) 第二十六章 曰。禮。樂。則。修。分。義。則。明。舉。措。則。時。愛。利。則。刑。如。是。則。百。姓。貴。之。如。帝。王。親。之。如。父。母。畏。之。如。神。明。</p>	<p>疆國篇 禮。樂。則。修。分。義。則。明。舉。措。則。時。愛。利。則。形。如。是。百。姓。貴。之。如。帝。高。之。如。天。親。之。如。父。母。畏。之。如。神。明。</p>

<p>(41) 卷七 第六章 子以知者爲無罪乎、則王子比干何爲刳心而死、子以義者爲聽乎。</p>	<p>有坐篇 女以知者爲必用邪。王子比干不見刳心乎。女以忠者爲必用邪。</p>
<p>(42) 第二十二章 孔子曰、善哉、爾之間也。爲人下、其猶土乎。子貢未達。孔子曰、夫土者、掘之得甘泉焉、樹之得五穀焉、草木植焉、禽獸育焉。</p>	<p>堯問篇 孔子曰、爲人下者乎、其猶土也。深扣之而得甘泉焉、樹之而五穀蕃焉、草木植焉、禽獸育焉。</p>
<p>(43) 卷八 第二十三章 孔子燕居、子貢攝齊而前曰、弟子事夫子有年矣、才竭而智罷、倦於學問、不能復進。請一休焉。孔子曰賜也欲焉休乎。曰、賜欲休於事君。</p>	<p>大略篇 子貢問於孔子曰、賜倦於學矣、願息事君。孔子曰、詩云、溫恭朝夕、執事有恪。事君難、事君焉可息哉。</p>
<p>(44) 卷九 第四章 古人有言曰、衣歟膠歟、曾不爾聊、子勞以事其親、無此三者、何爲無孝之名。</p>	<p>子道篇 古之人有言曰、衣與繆與不女聊、今夙興夜寐、耕耘樹藝、手足胼胝以養其親、無此三者、則何爲而無孝之名也……。</p>

(45) 卷十 第四章
 北面而弔乎天子曰、大命即至矣、如。之。何。憂。之。長。也、
 授天子策一矣。

大略篇
 天子即位、上卿進曰、如。之。何。憂。之。長。也。能除患則爲
 福……授天子一策。